〔我衣〕寛文ノ比、黒糸ニテ髪ヲ結フコトハヤル、好色ナル者ニアリ、

〔台記〕保延二年十二月八日辛丑、夜前梳髪、今日取本鳥、改紙本結用紫本結、

○按ズルニ、本文ハ喪中紙本結ヲ用ヒシモノ此日除服、平常ノ紫本結ニ復セシナリ、

〔祭主輔親卿集〕すみける女のたえにけるがもとより、かみをもとゆひにしたるが、むすびながら

あるをおこすとて、

年ひさにはかなき物はかみさびてふるき契のあせずぞ有ける

とあるかへし

いそのかみ結びおきてし元ゆひは古きながらに忘れやはする

〔奇異雜談集二〕戸津坂本にて女人僧を逐て共に瀬田の橋に身をなげ大蛇になりし事

かの婦人いほりにきたりて、御僧はいづかたへぞととへば、内衆たゞいま門へ御出といふ、婦人すなはち門を出でゝ、こゝかしこをみれば、二町ばかり南にその影みえたり、婦人そのまゝはしりゆく、急にはしるゆへに、蘭金剛やがてやぶれて、はだしになりてはしりゆく、一回むすぶおびはきれておち、かたびらのもすそは風にふかれてうしろへひるがへる、かしらは紙筋きれて髪ながくみだれて、うしろによこになびく、命をすてゝはしりゆく、

〔江家次第十七〕東宮御元服

二階南立唐匣、○略中第四層有續紙等、紙捻櫛巾也、永保入例紙違例

〔本朝世事談綺二器用〕紙捻又髪捻と書

中華に云所の髻なり、紙をひねりて髪の元を結ふにより元結といふ、近世までは、自分々々に紙を縷て、おのれが髪を結ひたる也、

〔我衣〕上古ハ髪付油、或ハコキ元結ト云コトナシ、老若共ニ胡麻油ニテ梳テ、コヨリ元結ニテ結タ